

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730723

研究課題名(和文)『エミール』再考 宗教を基盤に据えた人格形成論として

研究課題名(英文) A Reconsideration of Emile: A Theory of Character Development Based on a Religious Perspective

研究代表者

田中 マリア (TANAKA, Maria)

筑波大学・人間系・助教

研究者番号：20434425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代教育思想の祖と評されるルソー(J.J.Rousseau, 1712-1778)の教育思想について、それがキリスト教的な倫理観を基盤にして構想されたものであり、宗教なくしては成立し得ない人格形成論であったという観点に立ち、『エミール』を再考した。ルソー生誕300年を記念して新たに刊行されたルソー全集や、ジュネーブで開催されたルソー生誕300年記念事業への参加等を通して、より広範で多角的な視点を得ることができた。結果、『エミール』の続編でありながら、今日まで十分な評価が与えられてきたとは言い難い『エミールとソフィ』という作品に対する再評価の必要性を指摘し、成果報告としてまとめた。

研究成果の概要(英文)：This study reconsiders Emile, or On Education from the viewpoint that the philosophy of education by J.J. Rousseau (1712-1778), the father of modern educational philosophy, is constructed based on Christian ethics and its theory on character development does not hold without a religious mind. By reading the complete works of Rousseau that have been published anew to celebrate the tercentenary of his birth and by participating in commemorative projects held in Geneva, wider and further multiple viewpoints were obtained. The study concludes that there is a necessity to reevaluate Emilius and Sophia, a sequel to Emile, which thus far has received less appreciation than it deserves.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：ルソー 近代教育思想 道德教育 宗教

1. 研究開始当初の背景

ルソー (J. J. Rousseau. 1712-1778) の教育思想については、これまで概して、国内外ともに近代啓蒙主義的ヒューマンイズムの流れの中に位置づけられ解釈されることが多かった。そのことに起因してか、『エミール』に関して、アンシャンレジームからの脱却、キリスト教的世界観との断絶的な側面が強調される傾向が強かった。しかしながら、『エミール』第4編には『サヴォワ人助任司祭の信仰告白』(『信仰告白』)という宗教性の強い作品が組み入れられており、そこにルソーのキリスト教的信仰心、キリスト教的世界観との連続性がみられることを示唆した研究も少なからず存在している。ただし、これらの研究はもっぱら人文学的関心に基づいて検討されているため、『信仰告白』は「ルソーの宗教観の表明」としては高く評価されているものの、それが『エミール』全体の構想においていかなる意味を有していたのかという問題に関してまでは明らかにされていない。教育学の分野において、『エミール』の統一的理解を試み、『信仰告白』を教育論との関係において解釈した研究もないわけではないが、それらの研究をみても、『信仰告白』を、それまでもっぱら自然人として自分のためだけに生きるよう育てられてきたエミールがやがて成人となり、社会の中で他の人間とともに生きる市民あるいは有徳人として完成を迎えるために必要なプロセスであったととらえている点は注目に値するものの、そこで前提とされているルソーの宗教観が理神論的あるいは合理主義的なとらえ方の域をでていないと言わざるを得ない点において、十分とはいえない。

申請者はこれまで、大きく3つの研究論文を通して、ルソーの教育思想がキリスト教的な倫理観を基盤にして構想されたものであり、宗教なくしては成立し得ない人格形成論であったとみる視点を確立してきた。本研究ではこれまで確立してきた研究の視点、あるいは成果を踏まえ、『エミール』を宗教的世界観との連続性に着目しつつ、全面的にとらえ直すことを意図したものである。

2. 研究の目的

本研究は、近代教育思想の祖と評されるルソーの教育思想について、それがキリスト教的な倫理観を基盤にして構想されたものであり、宗教なくしては成立し得ない人格形成論であったという観点に立ち、これまで概して、近代啓蒙主義的ヒューマンイズムの流れの中で合理主義的に解釈されることの多かった『エミール』を、宗教教的世界観との連続性に着目しつつ、全面的にとらえ直すことを目的とする。

3. 研究の方法

『エミール』について、とりわけ幼少年期における教育論に関して、キリスト教的

世界観との連続的側面に着目し、そこに宗教的情操教育といっても過言ではないような情操教育論がみられることに言及した研究はほとんどない。それは先に述べたごとく、従来の先行研究が、アンシャンレジームからの脱却、教育の世俗化という流れのなかで、とりわけ公教育成立史の文脈において『エミール』を理解し、『社会契約論』や『ポーランド統治考』といった、ルソーの著作のなかでも比較的政治学的色彩の濃い著作との関連において研究を進めてきたことに起因していると考えられる。それに対し、本研究では、例えばフランス革命200年祭やルソー生誕200年祭を記念してフランスやジュネーブにおいて開催された国際シンポジウムにおいて初めてその価値が認められた『言語起源論』をはじめとして、従来、教育学の分野でも長期にわたり顧みられてこなかったルソーの宗教論、言語論、音楽論、演劇論、植物論などに関連した著作群に着目することで新たな解釈の可能性を探る。

また、本研究期間中には、折しも、ルソー生誕300年が回ってくる年周りでもあり、世界的規模の記念事業やイベント、大会や記念出版物の刊行などが予定されている。したがって、研究期間中はこうした、ルソー生誕300年記念事業にも積極的に参加し、できるだけ最新の動向をフォローしつつ、新たな知見や情報・資料収集に努めることも目的のひとつとしたい。ただし、ルソーが世界に与えた影響力の大きさや研究蓄積などを考えると、研究期間終了時にそれらの動向のすべてを成果に反映させることは不可能であるため、研究期間中にはひとまず、これらの記念事業の概要をまとめ、また動向や資料等について整理しつつ、今後、さらに研究を進める際の新たな視座・知見を得ることができれば、それをひとつの成果にしたいと考えている。

4. 研究成果

(1) 本研究の1年目にあたる2011年度は、上記の目的を達成するための基礎的研究として、従来の教育学研究があまり重要視してこなかったルソーの著作群(『社会契約論』や『ポーランド統治考』といった政治的色彩の濃い著作以外の作品群)や、それらに関連した史資料(和文・欧文双方を含む)を調査・収集するとともに、それら収集した資料の読解・分析を行った。そして、そのような基礎的文献にあたり、読解を進めていく中で、ルソーの教育思想をより深く理解していくためには、『エミールとソフィ』という、これまで教育学の分野においても等閑視される傾向にあった作品を中心に、これを『エミール』の続編として積極的に位置づけ、本作品の教育的意義を再評価するとともに、『エミール』を本作品との関係において読み直す必要があるという確信を得るに至った。

(2)そこで、次年度以降には、ルソーの教育思想全体を、上記のような視点、すなわち『エミールとソフィ』という続編へのつながりを意識しつつ読み直すという点をとくに意識しながら、改めて『エミール』を読み直していくことが2年目以降の課題となった。一方で、2012年度は先にも述べたごとく、折しも、ルソー生誕300年を記念して世界各地で様々な事業が企画・実施された年回りであった。そこで、2012年度は、本研究の目的のもうひとつのねらいであったルソーの研究動向についてフォローすることにも努めた。実際、300年に一度という奇跡的な年回りを記念し、世界レベルで多くのルソー研究者らがいつも以上に情報発信を試みており、この年、世界的規模で開催されたルソーの生誕300年記念事業に、その一部ではあるが、参加することができたことは本研究の大きな成果のひとつであった。

ルソー生誕300年記念事業期間中は、例えばインターネット上で紹介されているものをざっと挙げただけでも、アントニオ、イスタンブール、ウォータールー、ヴィッテンベルク、京都、グライフスヴァルト、グルノーブル、コロラドスプリングス、サンパウロ、サン・プレスト、シアトル、上海、シャンペリー、ジュネーヴ、テヘラン、東京、南京、ニューヨーク、ヌーシャテル、ノワイヨンパリ、ベルリン、ムルシア、モンペリエ、モンモランシー、リーズ、リヨン、ロンドン、横浜など、広範囲でルソー生誕300年に関連したイベントが開催されたようであり、また、実際にはインターネット上にあがってこないあがっていても把握しきれない小さな企画ものまでも考慮に入れれば、この期間中は、ほぼ数日に一回、世界のどこかでルソーに関連したイベントが開催されていたというような状況であった。

そのような中ですべての事業に参加し、また動向を把握することは当然、不可能であり、全ての研究を網羅することができていないわけではないが、本研究における助成金を得た成果として、ジュネーヴ市がSJJRと共催で5年以上の構想・準備期間をかけて執り行った国際大会や日本の記念事業に参加することができたことと、生誕300年事業の一環として記念出版された、ルソーの新全集、ガルニエ版とスラットキン&チャンピオン版の二種類 (*Jean-Jacques Rousseau (Œuvres complètes)*) を入手することができたことは、今後、ルソー研究を進めていく上でも非常に意義のあるものであった。

時間的制約もあり、ここで得た知見や動向について、今回の研究の中に十分反映させることはできなかったが、一部とはいえ、ルソー生誕300年記念事業のメインイベントに参加したことで得られた情報などに関しては、途中経過として簡単な報告書をまとめる形で整理しておいた。

ジュネーヴでは、2012年6月13日から16

日までの4日間、パレ・ド・ラテネ (Palais de l' Athénée) において、市の財政的援助も得ながら SJJR 国際大会が開催された。本大会における主たる論題は、「18世紀から今日までのルソーの友と敵」 (*Amis et ennemis de Jean-Jacques Rousseau du XVIII siècle à aujourd' hui.*) であった。大会プログラムにはテーマ設定の理由として以下の三点が挙げられていた。第一に、ルソーを超えた集いへの可能性、第二に、ルソーの著作が書かれた背景やその受け取られ方に触れることの学問的広がり、第三に、国際化への貢献であった。要するに、今大会の趣旨としては、ともすると私的でマニアックなものとして受け取られかねないルソー研究を、より多くの人々に開かれたものとして、発展的可能性をもつ普遍性を有するものとして共有化していこうとするものであり、そのことは、今回の大会が SJJR 協会だけで執り行われるのではなく、ジュネーヴ市も財政面だけでなく全面にわたって積極的に関与・支援を行っていたことから伝わってきた。期間中は、ジュネーヴ市近郊に至るまで「2012年みんなのためのルソー」というスローガンがあちらこちらに見られ、それら力の注ぎ具合を見ると、それらのコンセプトが単なるパフォーマンスではなく、ルソーひいては思想研究に対する新たな取り組み方、ある種の意志表明として見ることもできるのではないかという印象を持った。その意味でも本大会は世界的に見てもかなりインパクトの大きな大会であったと言えよう。大会開催期間中は4日間で総勢42名の発表者が「ルソーの友と敵」をテーマに、各々の関心領域からプレゼンテーションを行っており、発表者の国籍や所属、研究対象なども多種多様であった。本研究ではルソー生誕300年記念事業の一端に触れ、動向とともに多くの資料を収集できたことは今後、ルソーに関する様々な研究を継続することを考えても大きな収穫であった。

それに対し、日本の動向としては、例えば東京における国際大会なども、ジュネーヴとは規模が違ってはいたものの、内容に関しては興味深いものがたくさんあった。とくに植物学に関する研究や中江兆民訳に関する討論、共和主義とコスモポリタニズムなどに議論が及んだ際の緊張などは日本の文化や、その置かれている状況などを反映しており、考えさせられることが多かった。なお、本大会では、最後にコンサートが企画されており、日本においてはルソーの文献の中でしか見ることのできなかつた「村の占い師」が上演された。その他、日本におけるルソー生誕300年記念に関連した事業として、今回はとくに音楽関係の企画が充実していたように思われる。日本ではこれまで概して、ルソーの思想に関しては、哲学、政治学、文学といった分野に関心が集中しがちであったが、ルソーの思想において感性的な領域がいかに重んじられているかということを考えるならば、

その理論を検討する上で彼の芸術活動や音楽論にまで踏み込んでいかなければならず、その意味でも今回、彼の音楽家としての側面に光を当てた企画が充実していたことは特筆に値する。

(3) さて、本研究の最終年度にあたる2013年度は、初年度に基礎的作業を進める中で得た着想に基づき、『エミールとソフィ』を『エミール』の続編として積極的に位置づけ、本作品の教育的意義を再評価し、両者の統一的解釈を試みることによって、『エミール』の全体的な構想の捉え直しを行った。

その結果、以下のような点を指摘することが可能となった。すなわち、『エミール』において、ルソーが目的とした「生きること」の意味とは、いかなる境遇にあってもなお、神を信じ、人間を愛し、自らも愛される存在として生きるよう、そのように創られた人間としての生を全うしようとする、そのこと自体に意味があり、価値が置かれる類のものだったのではないか。ルソーは、『信仰告白』のなかで「いずれの国、いずれの宗派においても、何にもまして神を愛し、自分自身を愛するように隣人を愛すること、それが律法の大要諦です」と述べている。そして、それと同様の見解は、『エミール』の続編とも言える『エミールとソフィ』の構想時期に執筆された『ポーモン氏への手紙』のなかでも確認される。『ポーモン氏への手紙』の中でルソーは「真のキリスト教徒」について自らの見解を述べた箇所「コリント人への第一の手紙」第13章2節の「たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ無に等しい」という箇所と、13節の「それゆえ、信仰と希望と愛と、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」という箇所とを引用している。このような記述と関連づけて考えてみても、ルソーが上記のごとき人生観をもっていたと考えることができる。

しかしながら、一方で「いかなる境遇にあっても」そのような存在であり続けることは、単純なようでいて実は容易なことではない。人間は予期せぬ出来事によって翻弄され、裏切られ、傷つき、最愛の者に先立たれ、それまで築きあげてきた何もかもを、一瞬にして失ってしまうことすらある。それでもなお、そのような生き方を選択し続けるということは、理性の力や現世的・唯物的な世界観や倫理観を超えた視座が必要不可欠なものとなってくる。そして、そのような救霊的な目的論に立ち、『エミールとソフィ』との連続性において改めて『エミール』をとらえ直すならば、従来とは異なる『エミール』解釈の可能性が見えてくるものと考えられる。すなわち、従来のように『社会契約論』との関連において構想される市民形成論としてではなく、「信仰告白」を中心とした救霊的な目

的論のもとに構想された人間形成論として読み直す可能性である。

例えば、感じやすい魂が最初の衝撃を受けたとき、彼に自分自身を取り戻させたのはそれまでの教育であった。エミールは、最初の激情の合間におとずれる憔悴の瞬間に若かった頃のこと、先生のこと、自分のした勉強のことなどを思い出し、そのことがエミールに「自分は人間なのだ(j' étai s homme)」という気づきをもたらせた。それは非常に不完全で共通の死すべき運命をもった有限なる存在としての自己への回帰であった。そのような観点は第4編の『信仰告白』における教育の成果としてみることができる。

また、エミールが教師の引退を嘆いていたことについて、それを「恨みがましい」言葉、「甘えと依存」と一蹴する解釈もあるが、『エミール』から『エミールとソフィ』に連なる救霊的な側面に着目してこの箇所をとらえると、また別のとらえ方が可能性として見えてくる。すなわち、エミールを導く指導者の手は、直接的には教師の手であるが、その背後に執筆者であるルソーの手、さらにその向こうには自然すなわち神の手が含意されているという可能性である。したがって、ここでエミールが教師の引退を嘆くとき、それは単に一人の教師の手を離れたという問題ではなく、精神的な導き手である神の不在という問題をはらむものと思われる。とくに18世紀のフランスにおいて、宗教なき道徳の可能性が模索され始めていた時代にあつて、ルソーがそこに神なき時代における人間の姿を重ねていたとしても不思議ではないだろう。ましてルソーはこの頃、聖書をよく読んでいたと言われている。そうしてみると、ここは単なる養父から乳離れできないエミールの姿とみるのではなく、神の手を離れた人間の孤独と試練という観点から理解されるべきなのではないだろうか。事実、教師に宛てた手紙の中で綴られているのは、教師に対する「恨みがましき」ではなく、自らに課された試練の過程において何度も実感することのできた教育の力と、そのような教育を与えてくれた教師の配慮に対する謝辞なのである。その謝辞にあらわれている通り、何もかも失くし、このうえなく不幸を感じるエミールの人生を最後まで支え続けているのは、現世を超えた世界とのつながり、義なる魂の住みかにおける愛する者たちとの再会、それらを心のうちに感じることでできる自己の存在であった。

このようにして読むとき、『エミール』は「村のリーダー」として新しい社会を構築するパイオニアのための教育論ではなく、エミールという、ひとりの人間の魂のために書かれた救霊書として我々の前に立ち現われてくる。エミールは数々の不条理とも言うべき悲劇にみまわれ翻弄され、もはや現世における幸福を享受することも困難な精神状況におかれる。しかし、彼はそれでもなお残りの

生をまっとうしようとする。そこには来世における魂の救済と、愛するものとの永遠の幸福を見据えた生涯 それも魂の軌跡 が刻銘に記され、弱くも敬虔なる人間の姿が描き出されているだけなのである。そのように考えていくと、『エミールとソフィ』が未完のまま残されたということにも、当時の緊迫した出版事情とは別の、もっと深い意味があったのではないかとすら思われてくる。人間の運命はかくも不確かで曖昧なものである。人生の終焉も突然やってくる。本書は未完で終わっており、それが著者の本意か不本意かは謎であるが、本書が途中で途切れていることはそのような解釈を進める上で少しも妨げになるような問題ではない。

これまで教育学の分野において『エミールとソフィ』があまり顧みられてこなかったのは単に出版の経緯や未完といった問題だけでもないだろう。戦後、『エミール』は民主的な読み方がなされるようになったものの、社会の改革者、社会にとって有用な人材を育成するという発想自体は何も変わっていなかったものと推測される。「社会」や「市民」といった公教育論の文脈において『エミール』を評価しようとするあまり、一人の魂の軌跡を延々と綴っただけの本書はそのような文脈にそぐわないものとして遠ざけられてしまったのではないだろうか。

以上、本研究では、『エミール』について上記のごとく、それを宗教的世界観との連続性に着目し、宗教を基盤に据えた人格形成論として、最終的に『エミールとソフィ』との統一的解釈のもとに理解し直されるべきものであることを明らかにした。

なお、ルソー生誕 300 年事業における最新の研究動向に関しては、本研究においては、必ずしも十分反映させるまでには至れていないと言わざるを得ないが、本研究において収集することのできた情報、資料の中には、既にいくつか、今後の発展的な継続研究につながっていく重要な示唆を得たものもあった。それらの成果に関しては、今後、また別の形で報告、発信していくこととしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

田中マリア、ルソーの教育思想における「生きること」の意味 『エミールとソフィ』「第一の手紙」に焦点をあてて、日本ペスタロッチャー・フレイベル学会、人間教育の探究、第 25 号、2013 年、27-46 頁、査読有り

田中マリア、ルソー生誕 300 年記念事業の概要 ジュネーヴと東京の活動を中心に、筑波大学道徳教育研究会、道徳教育研究、第 14 号、2013 年、57 - 72 頁、査読無し

田中マリア、「生きる力」を育む教育に関する一考察 『エミールとソフィ』「第二の手紙」の示唆するもの、筑波大学道徳教育研究会、道徳教育研究、第 13 号、2012 年、1 - 12 頁、査読無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 マリア (TANAKA, Maria)

筑波大学・人間系・助教

研究者番号：20434425